

## 時空保護隊ツァイトリッター

### 第1話 To Heart 世界のメイドロボなのです

時は、いつか。所は、どこか。

盆栽取引で巨万の富を築いた大富豪リンディ・ハラオウンは、そのビジネスを他人に任せ、主要航路から離れた小惑星クライドを丸ごと買い取って邸宅とした。

悠々自適の生活を送っていると見られたリンディだが、その胸の奥には正義の心が燃えていた。増加し続ける広域次元犯罪。リンディもかつて働いていたミッドチルダ時空管理局は管理下世界の秩序を維持するだけで手一杯であり、オーバーテクノロジーを使った異世界への歴史干渉は、野放しにされていた。

息子クロノと娘フェイト、そして娘の友人八神はやての協力を得て、異世界の歴史改変を防ぐ時空保護隊ツァイトリッターは、今日もどこかへ羽ばたくのだ。

「ツァイトリッターの活動は、皆さんの活躍ですっかり軌道に乗りました」

ここは、リンディ邸の居間を兼ねる作戦室。透明なシールドを通して、大宇宙が見渡せる。大きなリンディのデスクと向かい合うように、隊員たちの肖像画がかかっている。

リンディは、隊員たちをいとおしそうに眺め渡すと、告げた。

「それぞれの作品世界での歴史を曲げる行為は、その場にいない多くの人の人生まで狂わせてしまうこととなります。興味本位に史実に干渉する人たちは、止めなければなりません。無数の人の人生を預かっていることに誇りと責任を持って、行動してください」

「やめてくれー。暑いよー」

「また?」

フェイトが声の主を探すのに時間はかからなかった。白い服の、身長30センチくらいの少女たち。ループアンテナのようなカールした毛を両側の白いリボンで止めている。それがわらわらと、1匹の動物を取り囲んで布をかぶせている。

「メイドさんごっこをやってるらしいんですが、ぼくは暑いのが苦手です」

「なのなのなのっ」

「なのなのっ」

「なのちゃんたち、ユーノくんは暑さに弱いんだから、こんなことしちゃだめよ」

フェイトがやさしく諭すと、やっとなのメカたちはユーノを解放した。別のなのメカが、自分たちのサイズからは巨大なうちわを持ち出して、ぱたぱたとユーノをあおいだ。

ユーノは、世界名作シリーズへの改変を防ぐ任務で北ヨーロッパに出動したとき、連れ帰ってきたフェレットである。そうした作品世界にありがちな「人語を放す動物」の1匹で、細かい作業、メカ修理の手伝いなどを担当する78体のなのメカが発する「なのなの言葉」を理解して人語に直せるし、何よりなのメカたちがユーノを気に入って手放さない。釘1本持ち出さないのが原則な歴史保護任務だが、いまさら元の世界に返せずにいるのだった。

「なのなの?」

「あ、ああ、涼しいよ。ありがとう」

うっかり答えてしまったユーノは、すぐに短慮の報いを受けることになった。10人ほどのなのメカが一斉のうちわを持ち出し、全力全開であおぎ始めたのだ。

「なの~~~~」

「うわああああ。飛ばされる」

リンディ隊長は苦笑いをして、朝礼を打ち切るしかなかった。

ミッドチルダの人里を離れた洋館に、ぼうっとした明かりが点るようになったのは、最近のことである。それを気にするような隣人は、ここにはいなかった。

「夜天の書にいわく」

静かな声が響いた。

「To Heart 世界の HMX-12 マルチは、優秀なメイドロボとして完成する」

かしこまって聞いていた中央の女性は、顔を上げて依頼主を見た。

「必ずや、ご期待に沿うように」

依頼主は、無表情な顔を3人に向けていたが、やがて虚空に溶け去り、消えていった。

3人の中で一番若い少女が、少し年上の若い女性に言った。

「ねえ、あたしの声って、やっぱり八奈見さん？」

問われた女性は優しく答えた。

「アリシア、そんなことはないでまんねんですよ」

「やっぱりあたしがボヤッキーだあ」

「おだまりっ」

最も年かさの女性が、たしなめた。

プレシア・テストロッサ。娘のアリシア、手下のリニスと共に、次元世界を又にかけるお尋ね者である。

「お前たち、出動用意だよっ」

「イエッサーですよ!」

ふたりは声をそろえて敬礼した。

「逆探失敗です。ああんくやしい」

エイミィはヘッドセットをはずして、罪もないヘッドアップディスプレイをにらみつけた。作戦室の端、普段はドリンクバーの付属テーブルを装っている場所が、エイミィの定位置になっている。

大犯罪者プレシア一味のアジトを見張るセンサーが、闇の歴史書「夜天の書」の意思を伝える通信を傍受したのである。「夜天の書」の正体と所在はまだ突き止められていなかった。

「To Heart 世界と言ったわね。特定できる？」

「通信に時空連続体座標が含まれていました。相対位置出ます」

リンディの机に、数字の羅列が出た。といっても多重時空連続体を表す数字は最低でも5次元になるので、それを直観に置き換えることは無意味で、せいぜい所要時間や燃料消費量の目安が導けるだけである。

「時空保護隊、出動。リッターアルフ、発進スタンバイ」

リッターアルフ。それは宇宙船とタイムマシンを兼ねる、全長60メートルの狼型メカである。

小惑星クライドには、もちろんリンディたちの生活を支える、表向きの宇宙船ドックがある。そのフライトレーン中央が地下に向けて斜めにぽっかり穴を開け、秘密ドックの中からリッターアルフがゆっくりと進み出た。両側の航路指示灯がオレンジ色の光を連ね、音もなく延長カタパルトが起き上がる。エイミィが型どおりの航路管制を行う。

「ノーマルスペース、進路クリア。基準点ビーコンA、ビーコンB、ビーコンC、送波よし。感、確認願います」

「確認した。基準座標固定、艦内時間軸、ミッドチルダ標準時に固定。リッターアルフ出るよ。しっかりつかまってるな」

気風のいい声と共に、リッターアルフは四肢を躍らせて、虚空へと駆け出した。

「リッターアルフ、多次元空間に入ります。TSTドライブ、イグニッション」

機関を預かるはやての声に、航行をつかさどるフェイトの声が重なった。

「TST航行、スリー、ツー、ワン、アヘッド」

リッターアルフの姿はぼやけ、ゆがみ、そして消えていった。

某月某日、来栖川重工中央研究所。メイド用アンドロイドHMX-12マルチの動作実験は急ピッチで、しかし粛々と進められていた。

布を脱ぎ捨てるようにオプティック・ハイドを解き、姿を現したプレシアトリオの前には、HMX-12専用のメカビットがあった。

「何、このキャタピラ」

「あっ、それ、台所なんかで安定優先のとき使うオプションなんです。切り替えが面倒だからボツになるらしいですう」

「ここにかかっているのは、重そうなショルダーベルトだねえ」

「ホウキとか背負って持ち歩くベルトなんですけど、メイドっぽくないからそれもボツですう」

「あんた詳しいねえ」

「いちおうメイドロボやってますから」

「ってあんたがマルチなのかい」

プレシアは、いつの間にか後ろにいた、来栖川重工の青い作業服を着た少女を改めてまじまじと見た。青いつばつき作業帽に、耳の白いレシーバー。

「はい、マルチです。呼びにくかったら、マルチって呼んでください」

「おんなじだよ」

「ようこそ、当社の立入禁止ゾーンへいらっしゃいました」

マルチはぺこりとお辞儀をした。

「で、あんたは料理がダメなんだって?」

「はわわあ。よくご存知ですねえ。みんなおいしいってにこにこ言って下さるんですけど、すぐに胃薬を取りに行ったり、おトイレに走って行かれたり」

「いったいどういう料理を食わせてるんだい」

「えーと、きょうお作りしたのは、マッシュポテトにヘルシーなサラダオイルを加えた炒め物で」

「ハッシュドポテトのばらけた奴だね」

「塩コショウガーリックで味付けして、お出ししました」

「油を切らずにカリカリにもしないで出したんだね」

「はい、ムースのような食感でした」

「それ、ドロドロっていうんだよ。脂ぎってるとも言うね。他には?」

「えーと、キュウリジュース」

「うーん、軟弱な青汁みたいなもんかね」

「目玉焼きのから揚げ」

「素敵に真っ黒なんだろうね」

「はい、基本に忠実に二度揚げしました」

「そりゃあ行き届いてるね」

言葉少なになるプレシアの横から、アリシアが口を挟んだ。

「あたしもねー。あたしもねー。パンにごはんですよを塗って食べてたら、お母様に怒られたの」

「はわわあ。今度やってみます。研究員さんがあつあつご飯にバターを乗せて、醤油をかけておいしそうに食べていて、真似しようと思ったら健康的な食べ物じゃないからダメだって」

「B級グルメ談義で盛り上がるんじゃないありませんっ。まったく恥ずかしいったら」

プレシアは娘を止めた。

「いや、あれは実にくまくてやめられないのですが、やはり飽和脂肪酸と塩分の塊というのはどうも」

「あっ、研究員さんだ」

プレシアが振り向くと、もう熟年といってよいスタッフが、穏やかにそこに立っていた。

「なんで次から次へ知らないうちに現れるんだい」

「立入禁止エリアでこれだけ長話をされていれば、そりゃあセンサーに引っかかりますさ」

研究員があくまでも穏やかなのは人柄だろう。

「研究員なら渡りに船。あんた、この子をもっと優秀なメイドロボにしたくないかい」

プレシアは催眠術をかけるように研究員を見た。

「マルチは、どう思う。優秀になりたいかい」

「あの…ご迷惑をおかけしたくないって言う気持ちは、とつてもあるんですけど」

マルチはおずおずと、研究員の問いかけに答えた。

「でも私は、ご主人様が帰ってくる場所を作りたいんです。会話があって、笑顔があって。おいしいものを作るなら、どうしてもお店とか、レストランとかの工夫には、かなわないんだし。せつかく感情をもらった私は、優秀になるより、もっと大切なことがあるんじゃないかって」

「で、ご主人様にサラダ油を食わせるのかい」

「はう〜」

「でも、えらいなあ」

「リニス、どっちの味方なんだよっ」

プレシアが説得を邪魔されて怒った。

「ええいっまだるっこしい」

プレシアは杖をかざすと、詠唱を始めた。

味付けるもの 煮付けるもの

いにしへのレシピに基づき その腕を振るえ

人工生命シェフロイド 生まれいでよ

地に魔法陣が光り、目つきの鋭い、白服白帽のヒューマノイドが姿を現した。

「シェフロイドよ、マルチに料理と家事の腕を与えるのだ」

「アレ・クイジーン」

プレシアの下知に従い、シェフロイドは背中から細い触手を無数に伸ばした。

「長瀬さん、大丈夫ですか」

若い研究所スタッフが、長瀬と呼ばれた研究員をかばうように飛び出してきた。そのひとりが触手に刺されたかと思うと、体を硬直させた。

「豚肉 150g は 1センチ程度のさいの目に切り、あわせ調味料に漬け込んで…」

何かのレシピが脳内に流れ込んでいるらしく、スタッフはそれを棒読みしている。プレ

シアは妖しく笑った。

「さあ、お前も道場さんにしてやるよ、マルチちゃん」

「そこまでだ!」

魔法陣が描かれ、クロノ、フェイト、そしてなのメカたちが現れた。

「時を歪める次元犯罪、法の網はくぐれても、ツァイトリッターは見逃さない。なのメカたち、あのクラゲもどきを取り押さえろ」

クロノは呼ばわった。

「なの～」

声をそろえてシェフロイドに飛びかかるなのメカたち。しかし触手は思いのほかすばしこい。次々になのメカたちが触手に刺され、何事かを棒読みにつぶやき始めた。

「なのなのなのなのなのなの」

「なのなの、なーなのなのなのなの」

「何と言ってるんだ、フェレット」

「牛肉とか豚肉とかチンゲンサイとかキャビアとか、その他色々です。それからぼくはフェレットじゃなくて、ユーノという名前が」

「なのなのなのなのなのなのーなのなの」

「なのな、なーなのなのなのなの、なのなの」

(中略)

「なのなの」

「ええいっ、うるさいうるさいうるさいっ。シェフロイド、洗脳攻撃中止だっ」

あたりに反響するなのなのの連呼に、最初に我慢できなくなったのはプレシアだった。触手が引っ込められ、シェフロイドが両腕を振り上げる。

「ゆくぞ、コガラス」

「はいな、若だんさん」

管理局勤めを終えて人の目がなくなり、リンディが日本趣味を注ぎ込んで作らせたクロノのデバイスが、コガラスである。カード型のスタンバイフォームから、近距離戦闘用のわずかに反った両刃剣へと変化する。その前に立ちふさがったのは、リニス。

「お相手します」

両腕の腕輪をクロスさせるように引き抜いたリニスは、命じた。

「キャットパンチャー、セットアップ」

「meow」

ナックルダスター型のデバイス、キャットパンチャーはリニスの4本の指に収まり、爪状の蒼く細い光が伸び出した。

「行くよ、コギツネ」

「まかり出ます」

フェイトのコギツネも、リンディが趣味で持たせたデバイスである。ペンダントに仕立てた、細長い琥珀色の宝石から杖上に変化したコギツネに、フェイトはさらに命じた。

「ナギナタ・フォーム!」

コギツネの名の通り、黄金色の光を先端に伸ばしたそれは、薙刀の形を取った。

「また出たな、この暴力娘っ」

アリシアが自分のデバイスを勢いよく放り上げた。

「バルディッシュ! サイズフォーム!」

「Yes,sir」

この常習犯と戦うのは何度目か、数知れない。フェイトには、この自分そっくりな女の子のデバイスに、妙な既視感があった。デバイスの発する色まで似ているのは、なぜだろう。

「いっくよー!」

相手にはそれがないらしい。フェイトは薙刀を振るった。デバイス同士がぎしぎしと力をぶつけ合う。

シェフロイドの伸ばした両手には、柳刃包丁が握られていた。それを振り回し、なのメカを追いかけるシェフロイド。

「動きを止めるんだ」

クロノが叫ぶ。なのメカたちは小さな杖を振るって、チェーンバインドをシェフロイドの足に引っ掛けた。前のめりに倒れたシェフロイドにチェーンバインドの雨が降り注ぐ。しかし背中 of 触手が再び動き出し、チェーンを断ち切り始めた。

「なのなのっ」

なのメカがひとり、重そうにびんを抱えて飛んできた。その中身をシェフロイドにぶちまける。

「いま習った料理を試してみるって言ってます」

ユーノが通訳した。なのメカはデバイスをシューティングモードに切り替える。

「なの」

ぴちっ。

ほんの小さなエネルギー弾が、振りかけられたブランデーの気化した部分に火をつけた。

「アレ、アレアレアレアレ、クイジ〜ン」

シェフロイドは床をのたうち回った後、空気が抜けるようにのびて、消滅してしまった。追い詰められるプレシアたち。

「シェフロイドがのびちまっちゃあ失敗だ。ずらかるよお前たち」

プレシアの足元に描かれた魔法陣めがけて、リニスとアリシアが飛んでくる。その後ろを、ひとりのなのメカが追いつがって、何かをビンごとぶちまけた。転送される瞬間、クロノもフェイトも、短い叫び声を聞いたような気がした。

転がり落ちたビンをクロノが拾ってみると、こう書かれていた。

「匂い保証! 本格キムチの素 1kg お徳用パック」

「なのん、なのん、なのん、なのん」

すっかり汚れて散らかってしまったメカピットは、なのメカが手伝って掃除することになった。揃いの白いツナギに着替えたなのメカたちが、床をデバイスでなぞって焼け焦げや食材のこぼれを消してゆく。マルチもモップを持って手伝った。

「物を作ってる人間なら誰でも、作ったものには性能一杯がんばってほしいと願ってるはずです。私もそうではあるんですがね」

長瀬はクロノとフェイトに言った。

「売れそうにないものを私の思いだけで作っちゃまって、あの子に苦勞をかけてるんじゃない

いかと、思うことがありますよ」

「あの子ども、長瀬さんと同じ思いでいるみたいですね」

フェイトに、長瀬は苦笑して答えた。

「だからこそ、つらいなあ」

「愛される人がいなければ、誰も愛を実らせることができないんだから、愛されるって大切じゃないのかな。愛する性能ばかりじゃなくて」

「ひとりでもいい。いいご主人に巡り会って、愛されてくれるといいんだが」

クロノは父の視線をよく覚えていない。こんな目だったのかもしれないな、とクロノは思った。

「プレシア様、やはり別々に炒めるものなのでは」

「ええいっ、もう少しのところなんだからねっ」

何の前触れもなく厨房に入ってきて、魔法も使わずにミートスパゲティに挑戦したプレシアだったが、ソースに麺を入れて火を止めずに混ぜ合わせ、鍋に焦げ付く麺をはがしているうちに加熱時間がかかりすぎて、麺と麺がくっついてしまった。

「ミートせんべいだあ」

アリシアがはしゃいだ。

「たっ、食べられりゃいいんだよっ」

「今度はあたしが一品作るねー。リニス、ちりめん山椒のパックと生卵とって。簡単だけど結構おいしい卵焼きだよ」

もっとちゃんとした料理を作ってやるのは簡単だが、とリニスは思う。

アリシアがこんなに表情豊かなのを見るのは、本当に久しぶりだ。

アリシアがずっと欲しかった時間。そしてそれが、自分がずっと見たかった光景でもあることに、リニスは気づいた。